



# コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレターNo. 129

2012年4月



## RMHに参加して

ねぎし おさむ  
防衛大学校3学年 根岸 撰

### 1. はじめに

私は、2010年9月京浜急行汐入駅で、偶然石川先生と知り合い、馬堀聖書教会やコルネリオ会・テモテ会に時々参加するようになりました。そこで、2011年夏のアメリカコロラドスプリングキャニオンで開催されるRMH(Rocky Mountain High)という青年軍人クリスチャンキャンプがあることを知り、一人で参加することを決心しました。

### 2. RMHの目的

RMHの目的は、青年軍人クリスチャンがお互いに主にある交わりを深め、神様と直接向き合う時間を持ち、危険な場所でも神様が共に居られ、守って下さることを体験することです。

### 3. 私の参加したRMHの日程とプログラム

プログラムはRMH6というコースで、日程は2011年7月31日—8月7日(7泊8日)でした。

**1日目:**参加者全員が現地に集合・夕食・自己紹介・夕食後オリエンテーション。その後イブニングセッション(皆で聖書の箇所を読み、その聖句について考えを話し合いました。これは毎日夕食の後に行われ、その日のプログラムから何を学んだかを反省します)。

**2日目:**本格的なプログラムの開始、ラフティング(ボートに乗り複数人で川を下りました。全員で協力し、目標を達成することの大切さを学びました。)

**3日目:**朝の礼拝・Holy Water Rockに向かい、ロッククライミングとラペリング(お互いが信頼し合い、任せる事の大切さを学びました。)

**4日目:**Trek(山登り)でイエール山の頂上を目指し出

発・山の中腹でキャンプ(頂上に向かって、どんな気持ちで登るのか、今自分は神とどう向き合っているか、お互いに説明し合いました。)

**5日目:**山頂付近でキャンプ、(ここではSoloといって一人で聖書の聖句と神について約3時間、考える時間を持ちました。)

**6日目:**頂上に到着(日に照らされた雲や山は輝いていました、苦勞しましたがその素晴らしい景色を見るだけで心が癒されました。)



キャンプ場前(右から3人目)



Trekへ出発前(右から2人目)

7日目：最初の宿泊地へ戻る（近くの温泉で山登りで溜まった疲れを癒しました）。夕食・イブニングセッション。

8日目：解散・空港へ

#### 4. 感想

初めての参加でしたが、非常に充実した一週間を過ごすことができました。特にプログラムのメインである Trek では、標高が高いので酸素が薄く、さらに重い荷物を担ぎ、きつい中で皆と歩き頂上までいったのはとても達成感がありました。またこの Trek では Solo が 2 回ほど行われ、神様や聖書について考える時間が今までで一番多くあり、様々な人の考えや意見を聞くこともできました。この Trek ではメンバーが互いに協力し、信頼し、助け合い、支えながら行うことができました。また、Trek の前のプログラムで学んだことをこの Trek では体験という形で再び学び、完成させるプログラムだと思いました。

RMH に参加でき本当に良かったと思います。RMH では英語が喋れるか、上手く皆とコミュニケーションがとれるかなど心配でしたが、韓国の防衛大留学生のチェ・ウォンビンさん（別便で参加）も一緒に、

私にわからない英語を教えてくれ、RMH に参加したメンバーも皆親切で非常に過ごしやすかったです。Solo をしていて思ったことは私が RMH に参加すると決まった時から、神様がすでに私のために良い環境を計画してくれたのではないかということでした。もっと前のことを考えると、去年、汐入駅で石川先生に会うことがなければ RMH に参加することもなければ、教会にも来ることもなかったはずですが、去年の時点で計画は進められていたのではないかと感じました。

反省点としてはもっと事前に英語の勉強をしておけばよかったなということです。生活は全部英語なので夕食のさい話題に困るということもありました。またラフティングやロッククライミングなど危険なことをする際にも注意事項は全部英語で説明されるので理解していないと自分の身を危険にさらすことになります。また聖書の題が英語と日本語で違うので探すのに一苦労でした。もっと聖書と英語を関連づけて勉強しなければと感じました。さらに、もっと神様を身近に感じて歩みたいと思いました。

### 神様からのプレゼントとイエス様のお蔭

防衛大学校博士課程学生 <sup>リュウ</sup>柳 <sup>ビョンジュン</sup>秉俊

子供の頃は、家庭問題、経済的な問題により、多くの精神的な悩みがありました。教会には、通っていましたが、不公平な神様だと思っていました。経済的な問題のため、授業料もかからない海軍兵学校に挑戦し、合格しました。しかし、これは神様の恵みであったはずなのに、それを理解しておらず、自分の力でできたという自惚れがありました。その後、頑張って生きようとしたのですが、何か虚無感を感じ始めました。ちょうどその頃、神様からいただいた最高のプレゼントである鄭周眞（ジョン・ジュジン）（現在の妻）との交際が始まりました。何もない私をイエス様のように愛してくれる彼女のお蔭で、イエス様を信じるようになりました。「しっかりした妻を誰が見つけることができよう。彼女の値打ちは真珠よりもはるかに尊い。」（箴言 31 : 10）

その後、また、神様の不思議な導きで、防衛大へ留学（修士課程）しました。全国民の 1 % も過ぎない日本人クリスチャンの姿は、私にとって、一つの大きな証となり、妻や徳梅先生の導きで、馬堀聖書教会で洗礼を受けました。

私のビジョンは、世界平和と軍の福音化です。また、日本自衛隊の福音化です。このために、頑張りたいと思います。現在、以下のことを決心しています。

決心 1 : 「主を恐れることは、知恵の初め。」（箴言 9 : 10）

決心 2 : 「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。」（箴言 16 : 3）

決心 3 : 「一人でいるとき、神と交わる。」

決心 4 : 「純潔を守る。聖なる人となる。」

## 東日本大震災の記憶（希望を約束して、導く神）

会員 山田 伊智郎

2011年3月11日（金）14時46分、宮城県三陸沖付近においてマグニチュード9.0の巨大地震が発生した。この地震により気象庁は14時50分太平洋沿岸部等に大津波警報を発令したが、想定をはるかに越える大津波が太平洋沿岸を襲い、特に岩手県三陸沖海岸から宮城県、福島県の沿岸部を中心に近代日本において例を見ない甚大な被害が発生した。当時、第2施設団の副団長の私は、揺れがおさまるのを待って、直ちに団の指揮所に向かった。発電機で電源が供給された指揮所ではスクリーンに宮城県南部沿岸地域が津波に飲み込まれてゆく光景が映し出されていた。現場に出た私は色々な光景を目にした、救出・復興活動が続くなかで自衛隊の活動に協力を申し出る人、コンビニやガソリンスタンドで寒い中、順序よく順番を待つ人達、一方、放置された車からガソリンを抜き取る人や被災した家屋から家電製品を盗む人達。しかし、神の愛はこれらの人達に平等に注ぐのだ。

あれから、1年が経過した。この震災で日本全体がダメージを受けたが、その内容は地域や立場により違い、また、立ち直りの経過も千差万別だ。当時の状況が未だ鮮明に残り心や体の傷として長く残り、日常生活にも苦しみが伴う人達、震災当初は自分の事とし

て思いを寄せても、日常の煩わしさにこの思いが埋没してゆき、その現実に関心を痛める人達。実際に地震を体験し救援・復旧活動の現場にいた私ですら、時間が経ち、勤務場所も変わることにより、地震の揺れの感覚や、初めて現場の景況を見た時の驚愕の思いは褪せつつある。大変残念なことで、記憶を風化させてはならないとの思いと、これは人として自然なことと、この現実を自分に納得させる。しかし、唯一、両方の人達に平等に寄り添うことができる方が、神なのだ。

色褪せる記憶の中で、震災当初から今に至るまで、一つの疑問が私の心を占めている。それは、なぜ、あの人達が犠牲になったのか。この問いに、キリスト者として答えを出すことが求められているような気がしてならないが、未だに釈然とした理解ができず、神の世界の不合理性を恨む。

今もその時の記憶が鮮明に残り心や体の傷が癒されていない人達、また、色褪せる記憶を押しとどめる事ができず、未だに自分の思いを整理できないだけでなく、その不合理性を恨む自分をも「よし」として将来への希望を約束して、導いてくれるのも神である。

（日本バプテスト連盟 横須賀長沢キリスト教会員）

## 黙想と祈り その2

会員 長濱 貴志

前回紹介しました通り、黙想における実例として、  
① 自然との対話、② み言葉を味わうことについて話そうと思います。

### ① 自然との対話

近くの公園を散歩するのですが、この冬の季節であれば、長く起立した霜柱、それを踏みつける感触、木々のシルエットなどは目、感覚を楽しませてくれるものです。

陽が昇り始めてからさえぎり始める野鳥は耳を楽しませ、春に近づくにつれ花々が香りを放ち、散

策を楽しませてくれます。自然は、神が創造された物の一端を示しています（創世記1：1）。そして、それらは美しく着飾っています。（マタイ6：29）

そのような、落ち着いた環境で何も持たず、み言葉を思い出しながら、思い出せないときは、ひたすら聴く姿勢、心持ちで散歩し続けます。

加藤先生は、一人になること、み言葉を思いめぐらすこと、時間と場所を決めること、最初は1から2時間くらいから始めたら良いと進めておられます。何が与えられるかと言いますと、その時々で

変わりますが、あるみ言葉を通して励まし、力が与えられこともあれば、み言葉に対する理解を深められることもあります。

② み言葉を味わう

詩篇第23篇より、

主は私の羊飼ひ、私は乏しいことはありません。

主は私を緑の牧場に伏させ、憩いの水のほとりに伴われます。・・・

加藤先生は、この詩篇を黙想に適したみ言葉として紹介くださっています。

私は当初、このみ言葉は、王として選ばれる以前の若い羊飼ひであった頃のダビデが、自らの職業を通して、神様を覚えたこと、感慨に耽ったことを知ったみ言葉として想像しておりました。

しかし、この詩を書いたダビデの人生を思い返すとき、波乱に満ちた人生を送ったことに気づきます。その彼がこの詩篇を通じて彼の人生をさらけ出し、どれだけ主に信頼しておられたのか、どのように人生の苦難を主とともに乗り越えて来たのかを伺わせるものでもあります。どの一句を取り上げても、

そこにある主がダビデになされた励まし、慰めを私も味わうことができます。

主は、裏切られず、私たちに良きものを与えてくださる方であり、いつも私の傍にいて必要なものを用意してくださり、ともに歩みを共感してくださる方であることを覚えるのです。

預言者から油注がれた幼少のダビデ、ゴリアテを投石で必殺した勇敢さ、サウルに妬まれ、追われ、あるいは逆襲してサウルの寝床まで潜入しサウルの息の根を止めることを直前で停めた時、勝利の凱旋、栄華、姦通、部下の暗殺、悔い改めなど、どの場面を思い起こしてもこの詩篇の背景としてダビデの人生を想像することは容易です。

ダビデの立場として、あるいは自分がその立場から心境を吐露したとして、主との親密さ、主への信頼を端的に表現したこの詩篇の深さを味わうことができるのです。

以上、① 自然との対話、② み言葉を味わうことを通しての黙想の実例を紹介しました。

## あなたの重荷を主にゆだねよ。(詩篇 55:2)

馬堀聖書教会牧師 徳梅 陽介

長男敬謙(たかのり)のためにお祈りとお支援を感謝します。

2011年9月8日に息子敬謙が入院し悪性の脳腫瘍と診断されました。最悪の場合あと半年の命と言われ、家内も自分も目の前が真っ暗になりました。「私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。」(詩篇 121:1-2) 主よ。どうしてですか。自分を打たずに息子を打ったのは。私は山に向かって目を上げました。主はこう言われました。「わたしは、お前を愛している。決して見捨てない。お前を守る」と。家族で毎日祈り続けました。予想を越えて、各方面、近所の方からもお祈りと支援を受けました。家内の妹夫婦からも徹夜で祈ったと知らせがありました。敬謙の中学生の友人は千羽鶴を送ってくれました。「主は、すべての災いから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。」「主は、あなたを、行くにも

帰るにも、今より永久までも守られる。」(詩篇 121:7-8) 永遠の都である天の故郷へ導いて下さいます。現在、放射線と抗がん剤の治療をしていただいております。治癒率は90%以上と言われました。すべては主のお蔭であり、今後も主にゆだねて行きたいと思っております。

### お祈りのお願い

- 引き続き徳梅敬謙さんの完全な癒しのためにお祈りください。
- 2014年にAMCF世界大会が南アフリカで開催されます。(2004年のソウルでの大会以来10年ぶりです。) 大会主催者側から献金の依頼があり、コルネリオ会として2012年と2013年とに各々\$2,500を献金することにしました。献金と参加がおこされるようにお祈りください。
- コルネリオ会員の新年度の歩みの上に守りと祝福がありますようにお祈りください。(特に異動された方々のために)

# ブラジル・アルゼンチンを旅行して

会員 圓林 栄喜

## 1 はじめに

ブラジルには自衛隊OBの下桑谷浩宣教師、アルゼンチンには在原繁宣教師といういずれも20年以上現地で奉仕しておられる先生方がおられます。なかなか地球の反対側まで行くなど考えられませんでした。年末年始に思いがけず長期の休暇をいただきましたので、12月22日から1月4日までの間、ブラジルとアルゼンチンを旅行してきました。今回はその際の体験談を報告したいと思います。

## 2 ブラジル・アリアンサへ（12月22日～24日）

成田からドバイまで12時間、ドバイでの乗り継ぎ待ち5時間、ドバイからサンパウロまで15時間、サンパウロで一泊休養し、サンパウロからアリアンサにもっとも近い空港のアラサツバまで1時間半、さらに車で1時間半と合計53時間の長旅でした。ブラジルは世界で5番目に広い国です。日本の2.3倍、私たち家族が行ったサンパウロ州は日本の北海道を除いた面積に匹敵する広さです。アラサツバまでの飛行機の眼下に広がる広大な大地、アラサツバからアリアンサまでの車窓に広がる広大な牧草地や農地を眺めていますと北海道の大地も可愛く見えてしまいます。

## 3 ブラジルにて

### (1) クリスマスイブ（12月24日）

ちょうどクリスマスイブでもあり、南国のクリスマスを体験できました。こちらにはユバ農場という日本から移住し共同生活をされているクリスチャンの団体があり、そこでクリスマスの夕食会の交わりに加えていただきました。肥沃な大地が生み出す食物はバラエティーに富んでおり、神の恵みの素晴らしさを覚えつつ感謝していただきました。

### (2) クリスマス（12月25日）

下桑谷宣教師が牧会しておられるアリアンサ教会のクリスマス礼拝に参加しました。礼拝は日本語で行われていましたが、日系人の教会でも日本語のみで礼拝する教会はほとんどないとのこと。礼拝後の教会員との交わりを通じて、ブラジルに入植

された方々の苦労話や3世、4世の方々への日本語教育の難しさを伺いました。

### (3) クリスマンアカデミー訪問（12月26日）

現在建設中のクリスマンアカデミー（アドラムの家）を訪問しました。広大な畑が広がっています。さまざまな問題を抱えた日本の青年が、ここに来て変えられていったという話を伺い、日本のような便利な生活はありませんが、豊かな自然の恵みとそこに暮らす様々な人々を見つめながら、どんな人も受け入れ、変えていく何かがあると感じました。それが何なのか具体的にはわかりませんでした。完成すれば、施設を通じてさらに大きな働きができると思います。神様から与えられたビジョンのもと、着々と計画が進められるようお祈りしました。

### (4) イリア・ソルテイアダム（12月27日）

早くもブラジル最終日となり、車で2時間ほどのところにあるイリア・ソルテイア（Ilha Solteira）というダムを見学しました。

このダムは発電所内の見学もでき、世界一の出力を誇るイタイプダムの約1/4の規模ではありながら344万kwという出力（ちなみに黒部ダムは34万kw）には驚かされました。

さらに昼食にはシュラスコ（ブラジル版焼肉）を堪能、夕食は教会員のご自宅での夕食会にお招きいただき楽しい時間を過ごしました。

## 4 アルゼンチン・モンテカルロへ（12月28日）

短期間の滞在ではありましたが、下桑谷先生、ホームステイさせていただいた安田典子姉らに別れを告げ、いったんサンパウロへ戻り、その後国内線でフォズド・イグアスというイグアスの滝の近くの空港へ行き、在原宣教師と合流して陸路でアルゼンチンへ入国しました。パラグアイ、ブラジルとの国境に立ち寄りながら2時間ほどで在原宣教師の活動地であるモンテカルロ市に到着しました。

アルゼンチンは移民の国です。ドイツ系の移民が多いようです。ドイツ人は勤勉で、体も大きく、ドイツ人としての意識、言語、伝統を継承しようと言



う意識が強いそうです。様々な国の人々がいるということは、よく言えば様々な文化にふれることができますが、悪く言えば日本人の常識は通用しないということでしょう。自分の意見をしっかり持たなければ信頼もされなければ、相手にもされない現実があることを感じました。

## 5 アルゼンチンにて

### (1) 家庭集会、祈祷会等（12月28日～30日）

到着してさっそく蛍が飛び交う森の中の一軒家での家庭集会、建設中のグアッタンブー教会での星空を見上げながらの祈祷会、子どもたち中心の礼拝に向けての賛美練習に集いました。いずれの集会でも感じたことですが、貧しさを感じさせない人々の明るさと教会を建て上げようという兄弟姉妹の熱い思いが伝わり、感動しました。

教会の祈祷会に参加した時のことです。教会のアラジーノ牧師夫人が在原先生を通じて私たちにみことばをくださいました。それは「エレミヤがまだ監視の庭に閉じ込められていたとき、再びエレミヤに次のような主のことばがあった。「地をつくられた主、それを形造って確立させた主、その名は主である方がこう仰せられる。わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」（エレミヤ書33章1～3節）のみことばでした。夫人は「このみことばを日本に持ち帰りなさい。それが日本の祝福となるから。」と言われました。神様のご計画はわかりませんが、皆さんにもこのみことばをお伝えしたいと思います。

### (2) 大晦日（アサード）（12月31日）

アルゼンチンでは大晦日には親類縁者が一堂に会し、夕食会を開き花火を打ち上げながら年越しをします。それも午後10時という遅い時間から始まります。在原家の年越し晩餐会に参加させていただき、楽しいひと時をもてました。

### (3) 新年主日礼拝（1月1日）

非常に暑いせいもあるのでしょうか、こちらの主日礼拝は夜行なわれます。小さな子どもから大人まで一緒に礼拝をささげる姿を見ます。子供たちはみなきちんと座り牧師先生の話を聞いていますし、心

からの賛美を捧げています。これが神様への礼拝の姿なのだと教えられました。

### (4) イグアスの滝訪問（1月2日）

最終日には世界一の規模を誇るイグアスの滝を見に行きました。環境保護のため車の立入りは規制され、電車を乗り継ぎ、川の上の歩道橋をわたり「悪魔ののど」と呼ばれる場所にたどり着きました。映画「ザミッション」が思い出され、人間の小ささと創造主の御業のすごさを改めて認識した次第です。

## 4 さいごに

今回、家族で旅行しましたが、子どもたちにも本当に良い体験であったと思います。息子は多くの動植物との触れ合いを通じ、今度はぜひパンタナール（世界一の湿地帯）に行きたいと申し出ておりました。ブラジル・アリアンサには4泊、アルゼンチン・モンテカルロには5泊と短い滞在でしたが、南アメリカの宣教の現状を見聞きし、日本を外から眺めることができました。

旅行間、多くの兄弟姉妹の暖かな歓迎と支援をいただきほんとうに感謝しています。神様が豊かな祝福と恵みで報いてくださるようお祈りしつつ報告を終わります。感謝をもって



イリア・ソルテイアダムにて



イグアスの滝にて